別記様式(第4条関係)

会議録

会議の名称	令和5年度　第2回　加東市社会教育委員の会議兼公民館運営審議会
開催日時	令和5年12月12日(火)　　10時00分から11時50分まで
開催場所	加東市社公民館　2階　視聴覚教室

議長の氏名　(　安原　一樹　)

出席及び欠席委員の氏名

○出席　・安原　一樹委員長　　・神戸　滋和副委員長
　　　　・荒木　　勉委員　　　・藤尾　桂子委員
　　　　・竹内　守男委員　　　・近澤　玉幸委員
　　　　・柿本　美穂委員　　　・石田　れい子委員
　　　　・尾崎　高弘委員

○欠席　・土肥　昭彦委員　　　・堂下　哲子委員

説明のため出席した者の職氏名

・教育振興部長　鈴木　敏久
・中央図書館　　館長　田中　美紀子
・人権協働課　　課長　小坂　淳子
・生涯学習課　　課長　岸本　孝司
・　　同　　　東条公民館　館長　竹内　喜博
・　　同　　　滝野公民館　係長　吉谷　充弘

出席した事務局職員の氏名及びその職名

・生涯学習課　副課長　大西　直美
・　　同　　　主査　　福島　奨平

議題、会議結果、会議の経過及び資料名

開会

１　あいさつ　安原委員長

２　協議報告事項

（１）令和５年度　生涯学習事業の進捗状況について

・生涯学習課　・人権協働課　・中央図書館

〇資料に基づき説明

【協議】

委　員：　文化祭や秋のフェスティバルの人数について、加東市が考えている数字として多いのか、少ないのか。私からすると、1000人を超えると多いと思うが、２日間とも来ている人もいるとすると、加東市は行事をするときにこの数字を多いと考えるのか少ないと考えるのか、ＰＲの仕方に興味がある。

事務局：　担当としては多いと認識している。ただ駐車場の問題があり、見たかったのにと思う方もおられるのではないかと思う。特に文化祭については、子ども達が滝野公民館での展示ということで、近くに駐車ができなかったという苦情も聞いている。せっかく来たのに見られなかったということもあったので、工夫すればもう少し来場者数が確保できたのではないかと思うので、次回の開催では少し解消できたらと思っている。また、この時に滝野公民館や地域交流センターが工事をしている時期と重なっていたので駐車場の確保が難しかったのと、近くに停めたいという方がいたので混雑したというのもある。次回以降は、同時に開催することによって多くの方に見ていただける機会が増えるのではないかということで、駐車場や見ていただける方のことを考えて次年度開催したいと考えている。

委　員：　同じページの美術展のところで出展数が３７６点とあるが、これは例年、同じようなメンバーの方が出展されているのか。それともかなり入れ替えをしながら３７６点になっているのか。

事務局：　昨年も出されていて今年もという方も中にはいる。出展者の分析は、まだしていないが、初めて出すということを受付で言われた方もたくさんいらっしゃったので、コロナ禍も明けて出展数はこれから増えていくのではないかという認識もしているが、同じ方が賞を目指して出されるということもあり、「昨年無理だったので、今年こそは」と取り組んでおられる姿も確認している。ただ同じ方が一度賞を取られたら、もう一度取られるかというとそういうことではなく、出展されても招待作品という形での展示になる。

委　員：　例年出される方が悪いと申し上げているわけではない。例年出される方、作品ができたときだけ出される方もいると思うが、参加を広げ

ていくような施策をこの中に入れる必要があるのではないか。そういうことをすることによって、こういうことに繋がる。それと同じようなことが、青少年健全育成事業と全く同じで参加児童数４８９人、加東市の人数からすれば、これは少ない。毎回同じ子たちばかりが参加してくれている。それはそれでいい。毎年計画する側としては重要な資料である。なぜ新たに来てくれないのか、その辺の情報も掴んだうえで今年も４８９人にしかならなかった、毎年同じことをやって、何人参加した。これは評価にはならない。社会教育の評価は個人でしないといけない。ついでに感想を申し上げると、組織目標があるなら、個人の目標があるはず。それがどこにも出てきていない。次に事業のところにいくと、ねらいがある。「自立して力強く生き抜く力、人間力云々…」ここで書きそうなことをここでも書いている。なぜこうなるかというと目標と目的・ねらいがごちゃごちゃになっていると思う。「富士山の頂上に登る」これが目的。「１日目は３合目まで」これが目標。個人の目標の立て方がどこにも出てこない。せっかく手引きが出来上がったのにそれがこの中にリードアップされていない。手引き書はまだ素案である。指導者の方と学習者の方の色々なご意見をこれからもらって素案を完成させる。これは評価できないので、その指導者の意見もそれから学習者の意見ももらうことができない。こういう書き方になるということはあの手引き書に全く関わらなくても書ける。手引き書が全く活かされていない。事務局の方が手引き書のもともとの案をゴミ捨て場に捨てられた。だから、何年経っても手引き書は完成しない。それが明確に言えるのは、３月の点検と評価が全く書けないはずである。目標がないのに評価ができるはずがない。せっかくここで何回もご意見をもらって素案を作った、数年かけて素案を完成させよう、あとは指導者の方あるいは学習者の方、その方々が手引き書どおりに辿ってやっていったら、どのような不満が起こるか、どのようなところがわかりにくいか考えていきましょう。そうすることによって数年後には、ある程度加東市の社会教育事業の実践が出来上がるのではないかと。それを目指してやったはず。それを残念ながら捨てられているなとそう思えてならない。

最初に戻るが、出展者にしても参加者にしても数でどうこう言うのは、学校教育では大問題である。必ず受けなければいけないのが前提になっている。社会教育はやろうとやろうまいと個人の自由だから、参加者数ということが無意味じゃない。多いほうがいい。社会教育の成果を個人が得ようとすると周囲に仲間がいる。仲間がいるので数を書いている。その３５６人の中で一人一人がどういうねらいに対してどういう目標を立てて参加してくれたのか。それが資料としてあって、そのプログラムが終わる頃に満足したか、来年もまた来ようと思ったか、そういうのが３月の評価の資料としてあり、だから実践としてよかったとかうまくいかなかったとか、何が悪かったとか書けば

いい。そのシステムを作ろうとあの手引きを作ったはずだが、この書き方だと評価はしないのでという。勝手な言い方になるが、わかりやすく言えばそういうことである。評価しないように書こうとするとこの書き方になる。

委　員：　私も同感である。数字を書くのは私でもできる。でも社会教育委員のこういう場においてこの数字は多いと言われたが、その答えを聞いて実は残念だった。多いわけない。加東市の人口を考えたときに、もっと多く広めようというところが、この集まりだと思うので、何が足りなくてこの数字になったのか、もっと望んでいたがこういうところが足りなかったから広めることができなかったと、ここに書き添えていくのがこういう場の集まりだと思う。それに対して私達もこうしたらいいのではないか、こうしていこうと出し合う場だと思ってこの会に参加していたので。ここだけではなく色々な場に参加して、数字だけ並べられても、私は数字は信じない方である。数字に含まれたものが知りたい。なぜこの数字が、こうなったかというのを付け加えてもらったら、私達も意見が出し合えると思う。なにかそういう工夫がほしいなと思った。

委員長：　今ご指摘なさったことは戦後の社会教育事業の学会でもクリアしていない課題である。学校教育と違って、誰がどう評価するのがいいのか、はたして評価していいのかと。例えば学校だと勉強した成果はテストとか様々な形で計らないと次のステップに進まない。でも社会教育においては同じ事業に同じ人が毎年参加していても去年来たからもういいよというのが基本的にはない。だから、学生参加者の自己満足感とかあるいは自己実現度というものが非常に大きな割合を占める。ただそこを行政が果たしてどこまで踏み込んで、「あなたは去年も参加していたけれど、今年も参加しましたね。どれだけ自分で変われましたか。」というのをよく社会教育の現場でやっているが、参加者によっては、「そのようなことは関係ない、大きなお世話だ。私は好きで来ているんだ」という人もいるわけである。だから今、指摘されたことは正論ではあるが、社会教育の現場では学術的にもクリアされていない大きな課題だということは認識をしていただきたい。

　確かに数字そのものは、戦後すぐの頃に下駄数えの社会教育と言われた時代がある。社会教育主事や公民館主事というのは、要は何をするかというと講演会であれば講師の方が来て講演会をすると、冬は寒いから会場を閉めて靴を脱いで会場に上がる下駄を数えるだけだったのである。だから下駄数えの公民館主事と呼ばれたわけである。どうしてそう呼ばれたかというと、下駄が大きな成功だからである。少なかったら失敗。私の父が最初に公民館主事をやった時に館長にそう言われた。でもすごく異論があり、中身は見ないのか。そのころアンケートはなかったので、学習者がどのように感じているのか。そういう状況から戦後２４年、社協から始まって現実に長い時間経っている

が、この評価の問題についてはなかなか難しいというのもある。

委　員：　あえて反論するようになるが、手引き書を作ったのである。だから、アラビア数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、これで構成している。Ⅰが学校教育と社会教育、これが不可欠である。優劣がつくのではなく、人を作り上げようとするとその２つがいる。この２つの中身は明らかに違う。学校教育は共通の学習であるため評価がいる。社会教育は他の者がその個人について評価をしてはいけないので、あの手引き書では社会教育の色々な事業に参加して個人が自分の評価をできるようにしようとすると、「楽しさ体験」これしかない。「楽しさ体験」のときに皆さん笑われる。冒涜しているのではないか。手引き書の最後の補足のところで書いている「楽しさ体験」で言う楽しさは、「可笑しい。面白い。」は排斥している。「可笑しい。面白い。」は、他の人の所作を見ても湧き上がる心情である。でも「楽しさ体験」には４種ある。これはみんなに共通する４種である。どの種類を獲得しようとしても必ず自分が行動を起こさなかったら獲得することができない楽しさである。だから、それを４種のうちのどれか、あるいは４種ともそれぞれ個人が目標とし、毎回参加をしてもらう。それが得られればこれは満足してくれたということだから次も来てくれるなと。そのようにして、事業がある、ないではなく、自分個人として一生それに関わってくれるような人達を養成したい。これが社会教育のフィールドであると、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに分けて書いているわけである。Ⅰでは、学校教育と社会教育の違い、Ⅱでは、社会教育には、色々な事業があるため一筋縄ではいかないと書いている。Ⅲは、実践のときの計画の立て方、目標の立て方について書いている。読んでいただいて指導者の方が「ここが分かりにくい。いざやろうとすると難しい。」とかそんなことがあれば事務局にどんどん言っていただき、あるいは学習者の方に言っていただいて、意見が返ってくる。それによってこう変えていこうと。

　ご心配の評価は、加東市の実践では、社会教育の評価は他人がする。これを禁止した形に変えて個人が評価する。社会教育は自分づくりであるから、自分のことは自分が評価できるというのが一番の大前提なので、一生を送る上では、人の評価がどうかというのは大事だが、それ以前に自分に対する自分の評価は自分でする。このことを究極のねらいとして社会教育は実施されている。手引き書ではそういう流れになっているはず。だからあれを早急に仕上げて、これが加東市の実践書であると出せるように。残念ながらまだ素案であるので。

委員長：　言っていることはほとんど同じであるが、プロセスや評価の問題については研究が進んでいないということもあるので、果たして評価をしていいものかどうかという抜本的な哲学的な問答は、まとまらない。「評価されるのであったら行かない」という市民の方もおられる。ある事業に参加したときに、「何がおもしろかったですか、どんな点が問題だと思いましたか。あるいはどのように改善したら楽しい学習

になると思いましたか。」そんなことをいちいち聞かれるのであったら、もう行かないと。学校教育と決定的に違うのは、来るという強制力もなければ、そこでの学習に対する他者の意思というのを、意識の高い人だったら色々なことを吸収して、次のステップに繋げようという人もおられるが、全くそうでない方もおられるわけである。それこそ講演会では、「人数が足りない。だから来てください。」と言って、「行きたくもないのに来た。」人権教育なんかは随分そのようなことで話を聞いた。「行きたくなかったけれども、教育委員会の面々で人数合わせで来てくれと言われて嫌々来た。」と。「話の中身が面白かったという言い方はされていないが、いい話だったからよかった。」と言われると嬉しかったし、社会教育の現場では難しいところもあるので評価については時間があったら、またやりたいと思う。

事務局：　ご指摘いただいた件について、まず小学生チャレンジスクールという子ども達を対象とした事業に関しては、手引きを作成した後、その中の４つの観点をアンケートの中に取り入れながら子ども達に振り返らせる時間を取っている。次回以降は、「こんな活動をしてみたい、こんな活動があったら参加してみたい。」ということを子ども達から吸い上げて、次年度の計画に活かしていくということを実施している。ただこの資料の中には、思いが見えないというお話をいただいたので、第１回の会議の時にご提案いただいたように、第３回の時には、評価として成果と課題という形であげていたが、人数だけでなく参加者個人の思いや担当個人のこのような内容で、ねらいをもって実施しているというようなこともわかるような資料に近づけたいと思うので、具材はアンケートや参加者の聞き取りから出てくる部分があるので、そういうものを第３回の時にはご提示して、委員の方に話していただけるような資料をつけたいと考えている。

委　員：　社の図書館がきれいになってよかった。夏頃に滝野図書館で、謎解きイベントがあり、子どもが中心だったと思う。大人もできるということで私も謎解きに参加した。行くところは毎回決まっているので、この謎解きで「こんなところにこんな本がある」と気づけてよかった。これはいい企画だったと思っている。これには何人くらい来たのか。

事務局：　謎解きゲームには、５３人が参加された。

３　グループ協議

テーマ「地域と学校をつなぐ社会教育の推進に向けて」

・地域学校協働活動へ関わる地域住民を増やすために

・公民館活動や各種団体と連携した取組について

○３つのグループに分かれて協議

４　全体交流（各グループから）

【協議】

グループ①

委　員：　地域学校協働活動について、地域住民を増やすという観点では、加東市は昔から地域住民と活動をしているので、昔からやってきたことをもう一度整理してまとめあげていくというのもいいのではないかという意見が出ている。高齢者でパワーのある方もたくさんいるので、もっと活用して事業などに関わってもらうようなことができればいいのではないか。あとシニアの方からも、もっと何かできることはないかと言っていただくことも多いので、まずは学校と地域が連携する、関わりたいと思う方に関わってもらえるような仕組みを作ることが大事ではないかということが出ている。

２つ目の観点では、難しいかもしれないが学校の先生に働きかけてこんなことはできないかと色々な形で提案していくこと。働き方改革もあるので、公民館活動であったり、各種団体の連携であったりとできる形を探っていくというのが大事ではないか。これも公民館や学校と連携していけるような仕組み作りというのがやはり大事だという意見が出た。東条で、今やっている取り組みが出ているのでそれをモデルに色々なことをしていくというのがいいのではないかという意見が出た。

グループ②

委　員：　トータル的な話をさせてもらった。大人が背中を見せて引っ張っていくというところ。今回文科省の資料がついているが、今の加東市の取り組み、東条学園や東条地域の活動については、これからの取っ掛かりとして加東市としてやっていく事業ではないかと思う。東条学園応援サポーター、活動の見える化をしていくこと、それから地域の方々が参加して、活動していける場所を作っていくことが大事であるという意見が出ている。

公民館活動としては東条学園応援サポーターのボランティアを増やしていく必要がある。サークルなどから地域の人材を発掘していくことが大事なのかなという話し合いで終わった。

あと見える化の中の見守り活動については、高齢者の方々をどう活用していくか、生き甲斐を見つけていただいて子ども達と関連して活動していくことがいいのではないかということでまとまった。

グループ③

委　員：　まず基本的なところで、コミュニケーションということがまず出てきた。昔なら家の玄関の戸を閉めていなかったが、最近はずっと閉めているという意見が出て、なぜそんなことになっているのかと考えると、自分の家の両隣ですら、誰が住んでいるのかわからない、そうい

うことからコミュニケーション自体が希薄になっているところが根本にあるのではないかという話になった。

地域活動に関わる地域住民を増やすにはどうしたらいいのか、子ども達が参加するようなことはないかという話については、地域でクリーンキャンペーンをやっており、そこには大人は参加しているが、子どもを入れるようにしたら、おじいちゃんやおばあちゃんと関われるのではないか、もう少しコミュニケーションをとれるような雰囲気作りができるのではないかという意見が出た。その中で、今の時期であれば、滝野地域でおじいちゃんやおばあちゃんとしめ縄作り体験をしている。元々日本に根付いている文化を継承していくきっかけ作りなどを色々な地域でやっていき、コミュニケーションの根本的なところをもう一度確立し直す方がいいのではないかいう話になった。

最後に、公民館活動、地域団体の連携については、生涯学習課では生涯学習サポーター倶楽部ということで、色々なことができる人が登録しているシステムがあるが、これに公民館活動や各団体が参加していけば色々なことができるのではないかという話になった。

【質疑応答】

委員長：　クリーンキャンペーンというのは、結構あちこちで盛んになっている。ネットで若い子達は、「駅前に何日の何時に集合」というようにしてやっている。全然知らない若い子達が来て、ゴミ袋を持って岡山駅の近くのゴミを拾うという活動に３回ほど参加したことがある。感心した。ネットで呼びかける人がいて、ターミナル駅で結構きれいなのかと思ったら割とあちこちにゴミがある。植え込みの奥につっこんであるのもあり、今ゴミ箱が駅とか色々なところで減っているので、けしからん奴が増えていて賢くなっているのかもしれないが、見えないように捨てる。そういうのに若い子達がネットで呼びかけてやるのを見て、新たな人と人との繋がりという時代になってきたのかなと。目的を明確にしてこういうことをやろうと。われわれ社会教育をやってきた人間からすると地域性や地域の関わり合いというのを非常に重要として来たので、それにプラスして今の時代にあったような人と人との繋がり方、新たな仕組みを作る方法を考えていったらいいのではないかと話し合いをしながら思った。

５　その他

次回開催時期　３月頃を予定

閉会　神戸委員長

令和６年１月３１日